

年間第十五主日

2010.7.11

申命記 30・10-14

ルカ 10・25-37

「わたしが今日あなたに命じる戒めは難しすぎるものでもなく、遠く及ばぬものでもない。それは天にあるものではないから、『誰かが天に昇り、私たちのためにそれを取って来て聞かせてくれれば、それを行うことが出来るのだが』と言うには及ばない。海のかなたにあるものではないから、『誰かが海のかなたに渡り、私たちのためにそれを取って来て、聞かせてくれれば、それを行うことが出来るのだが』と言うには及ばない。みことばはあなたのごく近くにあり、あなたの口と心にあるのだから、それを行うことが出来る』。」という、今日の第一朗読の申命記のことばが、何を私たちに告げているかは、今日の福音でイエスが語っておられる、サマリア人がしたことに目を向けるとき、一目瞭然となります。

今日の福音に登場するサマリア人は、普通よいサマリア人というふうと呼ばれ、今日の福音の箇所は、よいサマリア人の話というふうに言われています。しかし、聖書を開いてみると、どこにもこのサマリア人が「よい」というふうには言われていないことに気づきます。聖書の中にあえて「よい」と記すまでもなく、また、イエスがこのサマリア人がしたことを「よい」と言われるまでもなく、聖書になじみのない人にとっても、このサマリア人のしたことは「よい」ことであり、あのような行動を起こすことが出来たサマリア人は、「よい」サマリア人です。だからイエスの語られたこの話は、「よいサマリア人の話」であり、その中に登場するこのサマリア人は「よいサマリア人」と呼ばれているのです。私たちの心の中には、誰の心にも、このサマリア人のしたことを「よい」と認めざるをえない思いがあり、この人のことを「よいサマリア人」とある種の羨望をもって認め、称賛せざるをえない心の動きを感じます。

今日の福音の、律法の専門家との一連のやり取りにおいて、イエスが明らかにしようとしておられることは、旧約の律法の戒めによって神が求めておられることは、このように、誰の心の中にも響いているはずの「よい」と思われることを実行することであるということです。第一朗読の申命記のことばに戻って言えば、「わたしが今日、あなたがたに命じる戒めは難しすぎるものではなく、遠く及ばぬものでもない。・・・みことばはあなたのごく近くにあり、あなたの口と心にあるのだから、それを行うことが出来る」という、誰の心にも聴こえているはずの神の呼びかけ応えて、それを実行するということです。

イエスの時代のユダヤの人々の目から見れば、サマリアの人々は同じ先祖伝

来の国土の中に住みながら、旧約の律法の伝統から離れて暮らしている人々です。祭司やレビ人ではなく、そのサマリア人の一人が、強盗にあつて道端に倒れていた人に対してあのような行動を取ったと語るイエスのことばは、この対話の相手である律法の専門家に対する強烈な皮肉を込めた批判です。そしてそれは、この律法の専門家に代表される当時のユダヤ社会の指導的立場にあつた人々のあり方に対する批判でもあります。そればかりではなく、イエスが語られたこの話は、弟子たちの耳に焼きつき、福音書に記されることによって、イエスを信じる全てのキリスト者に対して自戒を促す警告のことばとして響いています。事実、私たちは私たちの周りに、キリスト者ではない、あのサマリア人のような多くの人々がいることを知っています。「行って、あなたも同じようにしなさい」とあの律法の専門家に言われたイエスは、今日、私たちにも同じことをお命じになっておられるのです。私たちに求められていることは、何よりも、謙虚さです。自分には、あのサマリア人のように行動する勇気も、隣人に対する真の関わりの姿勢もないことを認め、そのような勇気と隣人への愛の精神を願い求めたいと思います。

今日も私たちは、縁もゆかりもなかったはずの私たちのために、父なる神のみもとから私たちのもとに来てくださり、私たちのためにそのいのちの全てを与え尽くして、私たちを救ってくださった、私たちにとっての真のよいサマリア人である主の十字架の祭壇の前に祈りをささげ、そのいのちに与る聖体によって力づけられようとしています。わたしたちが捧げるべき祈りは、私たちもまた、その主のいのちに生かされて、私たちの主イエスがそうであられるように、すべての人に対してよいサマリア人となることが出来るようにということではないでしょうか。そのような勇気と力を願って、今日もこのミサをおささげいたしましょう。

カトリック高円寺教会  
主任司祭 吉池好高